
エンは異なるもの—俺のことかとソクルマ言い

小馬 徹

はじめに

1957年3月6日、英国領黄金海岸は黒人アフリカ最初の独立国ガーナとなる。同地の植民地化の契機となった初の条約（「1844年条約」）が英国政府と「部族長」たちの間で締結されたのが、実は同月同日だった。つまりガーナ独立の期日は、植民地の時間を象徴的に巻き戻して、アフリカ諸国独立の原点とするべく構想されたと言える。

翌1958年4月、ガーナ初代首相（1960年には大統領）ソクルマが第1回アフリカ独立諸国（8カ国）会議を同国の首都アクラで開き、「アフリカの年」と呼ばれる1960年には17もの地域が一斉に独立を果たす。アフリカ諸国の独立は更にまだまだ続いて、1965年には合計36カ国に達した。

このように、まさにアフリカ現代史の分水嶺となるガーナ独立の当日に、アフリカ解放運動の旗手を自認するソクルマは、*Ghana: The Autobiography of Kwame Nkruma*, London: Thomas Nelson and Sons Ltd.（K・エンクルマ『わが祖国への自伝』〔野間寛二郎訳〕理論社、1960年12月）を世に問うたのだった。

同書の本文は、「私の誕生について、ただ一つ確かだと思われるのは、私がエンジマのエンフル村に、九月なかばのある土曜日の昼ごろ生まれたということだけである」（The only certain facts about my birth appear to be that I was born in the village of Nkroful in Nzima around mid-day on a Saturday in mid-September.）という、短いが誠に印象深い段落から書き起こされている。小稿は、自他共に認めたパンアフリカニズムの旗手、ソク

ルマの日本語名表記が、一体なぜエンクルマなのかを巡る、些かの由無し言である。

一、「アフリカの年」と「アフリカ報道元年」

多くのアフリカ研究者が、上の素朴な疑問を長年胸底に潜めてきた。幸い、直接の当事者がその経緯を開陳する機会が先頃用意された。日本アフリカ学会第50回学術大会の公開記念講演「アフリカ研究の誕生」（2013年5月、東京大学）がそれで、演者の一人、元朝日新聞記者の奥野保男が当時のアフリカ報道の実情を率直に回顧しつつ、今も胸に蟠り続けている「エンクルマ問題」への屈折した思いを吐露したのだ。本節に、まずその報告の要点を簡潔に記す。

「アフリカの年」1960年の第15回国連総会は「アフリカ総会」と称され、同年が日本にとっての「アフリカ報道元年」ともなった。それ迄、アフリカ諸国の個々別々の問題の取材は、各社ともロンドンやパリ等、欧州駐在の記者を短期間派遣して凌いでいたが、抜本的な変革が迫られる。

同年9月、朝日新聞が真先にアフリカ40カ国・地域を回る「移動特派員」（roving correspondent）の設置を決め、奥野がそれに任じられた。だが、実際の出発は翌1961年3月、アフリカ到着は同年4月になる。アフリカの駐日公館は、当時アラブ連合、エチオピア、ガーナの3大使館、一方駐アフリカ日本大使館はその3国、並びにナイジェリアと（レオポルドビル・）コンゴの5ヶ国に過ぎず、入国ヴィザの取得やホテルの手配等が困難を極めた。そんな実情から、結局、奥野は当初の

アフリカ滞在予定2年間に1年間に縮めて帰国することにもなった。

当時の日本メディアは現地経験も正確な知識も乏しく、アフリカ報道にはごく初歩的な過誤が多かったと言う。奥野には「人名や地名の表記が分からないことは最大の問題で」、「ガーナの初代大統領ははじめヌクルマだったのがエンクルマに変わったのは『n』の誤読であった。これは私の友人と私の責任であるが、日本語にない『ン』をどうすればいいのだろう」（同学術大会『研究発表要旨集』）と、今も続く煩悶を隠さない。

その昵懇の友人とは、アフリカ事情通を自負した国会図書館専門調査員西野照太郎であり、奥野が西野の諫言を容れて朝日新聞に「ヌ」を「エン」に改めさせた旨、奥野は口頭で補足した。

二、「ヌ」から「エン」への変更の背景

では、「ヌ」から「エン」への変更は何時の事なのか。西野は、自著『鎖を断つアフリカ』（岩波新書、1954年）では「ヌクルマ」、『アフリカ読本』（時事通信社、1960年9月）では「エンクルマ」と表記している。この簡便な検討だけでも、それが奥野の旅立ち以前だと分かる — 『わが祖国への自伝』も西野や朝日新聞の表記に倣ったか。だが、奥野はガーナの地を踏んで、いずれも実際の発音と全く違うと即刻悟っただろう。爾来長く尾を引く苦衷と自戒の念が、「日本語にない『ン』をどうすればいいのだろう」の一節に色濃く滲む。

私には、それでもなお重大な疑問が残った。すなわち、Nkruma の語頭の子音前鼻音「n」が最初「ヌ」と表記され、次いで「エン」に変更された論理が依然不明のままなのだ。想像を逞しくすれば、「ヌ」としたのは、日本語は、①音節の基本構造が開音節で、②「ン」が語頭に来ず、さら



ランドクルーザーで調査中の光景。ロバでトウモロコシを市場に運ぶオバサンたちと（ケニア）

に③「n + 母音」（つまり、ナ行）の内では「ヌ」が最も「n」に近い、という判断によるのだろう。

他方、西野がそれを「エン」に変えた論理は容易に測り難い。ただ、国会図書館勤務の彼が英語版百科事典類でNkruma の発音情報を得た可能性がありそうだ。アムハラ語やアラビア語を例外として、アフリカのほとんどの言語がアルファベット表記の正書法を採る。だから、英語ではNkruma をそのまま文字表記できる。他方、発音情報は完全に捨象されることになる。

英語には、「子音前鼻音」で始まる語が全く存在していない。そこで、Nkruma の名前の最初に来る子音前鼻音「n」を英語でどう発音するべきかは、厄介な課題となる。*Encyclopaedia Britannica* は発音を示さない。一方、*The Encyclopedia Americana* は [ən-krōō' mæ]、*Academic American Encyclipedia* は [uhn-kroo-'mah] と、発音を特定する。だが、前者を採ればアングルマ、後者ならウクルマの表記の方がむしろエンクルマよりも適切だろう。

根拠を他に求めれば、西野が当時英語のニュース映画を見ていた可能性が想定できそうだ。管見の限り、英米人の発音は、ニュース映画では皆エ

ンクルマと聞こえる。英語に堪能でもアフリカ滞在経験が全くない西野は、英米人のニュース映画での音声に接して俄かに蒙を啓かれる思いをし、我が意を得た。そして、安んじてその権威に追従したのではなかったか。

三、アフリカの言語と「子音前鼻音」

アフリカ現代史の要石である ンクルマがエンクルマと誤記された実害は、決して小さくなかった。仮にもアフリカ人であれば、それがNkruma だとはまず気付くまい。そこで、今ではアフリカ語の語頭の「子音前鼻音」を「エン」とせず、音としては大胆に省略する表記さえも見られる。例えば、ノーベル文学賞候補に長く擬されてきたケニアの高名な小説家Ngugi (wa Thiong'o) を、アフリカ文学研究の泰斗である宮本正興は、あっさりグギと表記する。その方が、エングキよりも遙かに実際の発音に近く、アフリカ人にも通じ易い。グギという音を聞けば、アフリカ人にも、それがNgugiの日本語的な発音だとたやすく類推できる

と、私も自信をもって言えるのである。

アフリカには、「子音前鼻音」で始まる単語が例外的ではない言語が、決して少なくない。幸い、この事実の間接的な証明に援用可能な、手ごろな資料がある。即ち、『言語学大辞典』第2巻〔世界言語篇(中)〕(三省堂、1989年)が項目化した、「ン」で始まる世界中の諸言語名(1147～1193頁)がそれだ。その言語名自体がどれも、「子音前鼻音」で始まる単語をその言語が少くとも一つは持っている証拠となるのだから。そして、実にそのほとんどがアフリカの言語なのである。

なおここで、アフリカの1,825言語が、先ず①ニジェール・コンゴ語族(1,302言語)、②ナイル・サハラ語族(109言語)、③アフロ・アジア語族(275言語)、④コイサン語族(141言語)に大きく分類されることを紹介しておかなければならない。

さて、『言語学大辞典』で立項された「ン」で始まる名称の104言語は、①ニジェール・コンゴ語族93、②ナイル・サハラ語族2、③アフロ・アジア語族2で、アフリカ以外の言語は僅かに7



アフリカ大断層溪谷を見晴らす。日本人の知らないアフリカの自然と言語・文化・社会に教えられることは数多い。(筆者撮影)

言語（オーストロネシア語族3、オーストラリア先住民語1、南米インディアン諸語3）に過ぎない。なお、当該のニジェール・コンゴ語族93言語の内訳は、E.ベヌエ・コンゴ語派53、F.アダマワ・ウバンギ語派33、A.大西洋語派3、D.クワ語派3、B.マンデ語派1となる。さらにE.ベヌエ・コンゴ語派の53言語の内訳は、狭義のバントゥ諸語24、広義のバントゥ諸語25、クロスリバー諸語2、プラトー諸語1、ベヌエ諸語1である。

このように纏めると、「子音前鼻音」で始まる単語の日本語表記は、アフリカの言語の小さな領域の問題だと思われ兼ねないが、実はそうではないのである。付図（『言語学大辞典』第1巻、1988年、245頁）を参照すれば、ニジェール・コンゴ語族①がアフリカ大陸のほぼ南半分に当り、且つアフリカ大陸南部でも最も自然環境に恵まれて生産性が高く、人口も稠密な地域に、実に広く分布していることが分かるだろう。

さらに、以上の作業は、仮りに「子音前鼻音」で始まる言語名の存在を手掛かりとして、「子音前鼻音」で始まる語がアフリカの諸言語の重要な特徴の一つである事実を例証したに過ぎない。

実際には、言語名や言語系統の如何を問わず、アフリカの多くの言語で「子音前鼻音」で始まる単語は、実にありふれたものなのである。長年私が人類学の参与観察調査の対象としてきた、ケニアのカレンジン民族の言語（②ナイル・サハラ語族）もその一例である。因みに、私の調査拠点のマーケットの地名は、ソダナイ（Ndanai）と言う。

四、語頭の「n」のキメラ化と先祖返り

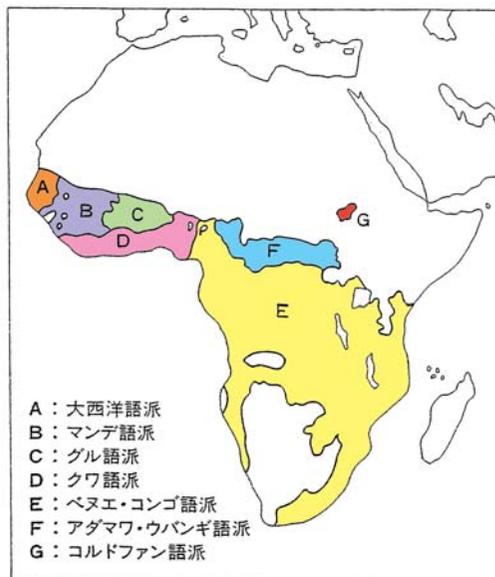
恐らくは奥野の帰国報告が震源となったのであろう、その後、語頭の「n」の日本語表記に変化が生じた。例えば、『世界伝記大事典2〈世界篇〉』

（ほるぶ社、1980年）は「エンクルマ」の項（388-391頁）で、彼が「ヌジマという小部族に生まれた」としている。『わが祖国への自伝』では「エン」と表記されたNzimaの「n」が「ヌ」に置き代わっているのが分かるだろう。なお同事典は、「エンクルマ」の項の前後に、ケニア独立前後の政治家「エンガラ」（Ngala）とドイツの統計学者「エンゲル」（Engel）を配している。

つまり、語頭の「n」が西野の諫言以前の表記「ヌ」に祖先返りしたのである。ただし、「エンガラ」（Ngala）に見るように、アフリカ人の名前に限って、語頭の「n」は「エン」でなおも押し通す原則が並存している。それは、①広く定着してしまったNkrumaの表記エンクルマの改訂が厄介だから、②他のアフリカ人名も「エン-」で押し通すという、いわば「糞土の牆を塗る」にも等しい姑息で退嬰的な対策だった。

実害は益々大きくなってしまい、宮本正興のよ

ニジェール・コンゴ語族の分布



出典：グリーンバーグ (Greenberg, 1963) [『言語学大辞典』第1巻、1988年、245頁]を基に作製

うにNgugiを「グギ」と表記する必要性が痛感されたのである。他方、私自身は1970年代からNdanaiを「ンダナイ」と表記する方式を採ってきた。カレンジン語では、「子音前鼻音」が音素として明確に対立をなすからである。「糞土の牆を塗る」彌縫策は、こうして「n」のキメラ化というさらに複雑な困難を招く結果になったのだ。

ここで、実害の別の面に少しだけ触れてみよう。ソクルマの母語はソズィマ(Nzima)語、またはソゼマ(Nzema)語と呼ばれ、ニジェール・コンゴ語族(①)のクワ語派(D)に属し、ガーナとコートジボワールの国境の東西に分布する。その24の子音の内4つが、鼻音(n, m, ŋ, ɲ)である。名詞の複数形は一般に接頭辞N-またはa-を単数形の語幹に付けて作るが、単数形の語頭が母音の場合はその母音を取ったうえでN-を付ける——さらに語幹語頭の子音も変化するが、説明は割愛する。例えば、*duku*(頭巾)の複数形は*nnuku*となる(『言語学大辞典』第2巻、1168-1171頁)。もし、これをエンヌクと表記すれば、「母音を取って複数化」するソズィマ語の文法を無視し、且つ無知のゆえに単数風の語形に逆戻りさせてしまうという、二重に背信的な操作になるだろう。一方、「ヌ」方式なら、「ヌヌク」と表記する愚を免れない。

前項で示したように、「子音前鼻音」で始まる名称を持つアフロ・アジア語(③)は、2言語に過ぎない。だが、アフロ・アジア語では、名詞に限らず「子音前鼻音」が語頭に來ることが、様々な言語現象で見られる。例えば、大言語であるハウサ語では/n/が一人称単数主語代名詞、クペレ語では一人称単数所有代名詞なのである。このように、アフリカの言語では、「子音前鼻音」が語頭に來る事例は普通で、枚挙に暇がない。

アフリカの言語や文化を研究する場合(特にイーミックな立場を重視する人類学のフィールドワークでは)、言語のそうした自然な体系性を出来る限り尊重した記述を心掛けることが、後々の分析的な論述で無理のない論理展開をするための必須の土台となる。だからこそ私は、Ndanaiをソダナイ、或いはンダナイと表記してきたのである。

五、なぜセメンヤは、今でもセメンヤなのか

日本語は、歴史的に、各王朝時代の中国語のみならず、オランダ語やポルトガル語、新しくは英語、独語、仏語、スペイン語、ポルトガル語等の西欧諸言語の影響を受けて、自らを豊かに革新してきた。それにも拘らず、アフリカ語に広く見られる「子音前鼻音」が語頭に來る単語の語頭を「ン」で表現することを、なぜ今も頑に拒み続けているのだろうか。

それらの音は、日本語の「ン」によく近似している。日本人でも、「ン」の音から発音し始めるのは容易だ。「んな馬鹿な」も、「んーん、困ったな」も、日頃ついつい口を突いて出てしまうはずだ。だから、日本語の音韻構造が基本的に開音節であっても、他言語の表記にそれを押しつけて済ますのは筋が違おう。エンクルマ問題の解決も、「語頭のn = ヌ」へと無原則に退行して事足りれとするのでは、日本語を豊かに生きる歴史や精神に反しよう。最後に、その退嬰主義的な姿勢一般が、実はさらに新たな問題を派生させていることに注意を喚起して、小稿を閉じたい。

2009年8月、ベルリンで開催された世界陸上選手権女子800メートル競走で優勝した、南アフリカ人選手Caster Semenya(当時18歳)が一躍世界の視線を集めた。ただし、性別疑惑の対象として。今問いたいのはその事ではない。彼女が日

本語ではセメンヤと表記される事実の方である。

アフリカ人なら、誰一人彼女をセメンヤとは呼ばず、セメニヤと呼ぶ——いわば、Kenyaがケニアであって、ケンヤでないと同様に。その事実日本マスコミが全く無頓着なのは、一体なぜだろう。本年2016年のリオ五輪の同競技の優勝者（セメニヤその人）の名前も、セメンヤのままだった。エンクルマにしてしまったからエンクルマで押し通すというのとそっくり同じ無神経と尊大不遜な（無）論理を感じずにはおれない。

おわりに

「日本語にない『ン』をどうすればいいのだろう」と、今も真摯に自問し続ける奥野。彼はその昔、はるばるガーナまで自ら出掛けて行き、Nkrumaがエンクルでないことを知って激しい衝撃を覚えて以来、自責の念に苛まれてきたのだ。その彼の姿に接して、謙虚で高貴な精神を感じた。

西野照太郎は、結果的に選択を大きく誤ったかも知れない。でも、彼は文献や映像資料を精査して、Nkrumaの「n」がどう発音されるのか突き詰めて知ろうと務めたはずだ。エンクルマをソクルマ（かクルマ）の表記に改めれば済むことなのだが、それはもう既に我々自身の問題だ。

今やSemenyaの発音を知ろうと、延々南ア迄出向く必要などもう何処にもない。インターネットなら、ものの数分できれいに方が付く。ほんのちょっとした当然の心遣いが、しかも（望むらくは）最初の機会にできたなら、この類の全ての事態が劇的に改善されるのだ。「縁は異なるもの」と言うではないか。それを忘れ、（恐らく日本語の「分節法」を無自覚な根拠として）無神経にもセメンヤと決めつけて少しも疑わないのなら、それは知に対するメディア側の冒瀆にも当るだろう。

セメニヤを何よりも苦しめ続けているのは、五輪のもつ「性二元的」文化の無反省な押しつけである。まさしく、これもまた文化に特有の「分節」の暴力と言ってよい。しかし、名前の読み方の分節の勝手気儘な押しつけは、その暴力にも強ち劣らないかも知れない。

書くとは、常に何かを意味付けることである。「ペンが剣よりも強し」が最も真実味を帯びるのは、皮肉にも、そのペンを普通の人々に向けて相手を無遠慮に切り刻む（分節する）時なのである。

〔追記〕近年新聞各紙は、鼻音で始まるアフリカ人名を「ヌー」と表記することがむしろ多くなっているようだ。これが一種の思考停止的な「先祖返り」の表記であることは、既に述べた通りであり、あらためて詳説する迄もないと思う。



筆者（文化人類学者）のフィールドワークの拠点、
ンダナイ（ケニア）の下宿—土間の書斎兼寝室